

氏名・（本籍地）	長尾隆寛（青森県）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第100号
学位授与の日付	平成27年3月16日
学位論文題目	法然上人「十七条御法語」の研究―伝承と展開の背景―
論文審査委員	主査 林田 康 順
	副査 勝 崎 裕 彦
	副査 小此木 輝 之

長尾隆寛 氏 学位請求論文審査報告書

「法然上人「十七条御法語」の研究―伝承と展開の背景―」

論文の内容の要旨

本学位請求論文は「法然上人「十七条御法語」の研究―伝承と展開の背景―」と題し、法然の遺文集として伝わる『西方指南抄』所収の「十七条御法語」について、一々の御法語がどのような経緯を経て「十七条御法語」としてまとめられたのか、その伝承を明らかにし、同時にそれに伴う諸問題を解決することを目的としている。従来の法然御法語研究は、法然の思想を明らかにするための証左として、その内容を検討することや、法然の教義書・遺文集・伝記類のなかでの比較検討による書誌的研究、思想研究が中心であった。しかし、本論では、真偽を確定することの重要性もふまえつつ、御法語の伝承に関する研究として、法然門下やさまざまな諸師の著作にまでその範囲を広げ、そこに説かれる人間関係等の背景をふまえたうえで考察を施している。本論においては、十七条各条について、はじめに内容解釈と問題提起を行い、法然教学との比較によって「十七条御法語」伝承の正統性や法然の思想について言及した上で、法然門下の著作や『語灯録』、『四十八巻伝』や『明義進行集』『広疑端決集』等との比較によって判明する背景をもとにその

伝承について考察している。

第一章では、はじめに「十七条御法語」に関わる、題名・説示順序・内容の三点について検討している。題名については、親鸞真筆本や版本、『昭法全』の段落分けとは異なる論者の見解を提示したうえで、全部で十七条になることを示し、題名は「十七条御法語」として間違いがないことを明らかにしている。次にその段落分けに基づいて各条を概観し、説示内容が起行論・教判論・安心論・作業論に大きく分けられること、十七条のうち大半の御法語が信瑞の『明義進行集』『広疑瑞決集』と深い関わりをもつことを指摘している。

第二章では、第一章で提示した二系統のうち、『明義進行集』の伝承系統に属する御法語である「十七条②・④・⑤・⑧・⑩・⑫・⑬・⑯・⑰」について検討している。これらの御法語の内容には一見統一性がみられないが、伝承という視点でみた時、各御法語に共通点がみられることを指摘している。「十七条②・⑰」には、釈尊出世本懐や宗義各別といった教判論が説かれており、唯一同内容が説かれる「一期物語」の記事より、この内容が、天台僧である公胤からの法然に対する非難が発端となっていることを明らかにしている。「十七条⑬・⑯」には、称念と観念といった念仏論が説かれ、「信空伝説の詞」や『明義進行集』の信空の項に同内容が示されているため、信空の人物像に注目している。この御法語では、源信と善導が比較して示されており、法然は源信の説示を用いることによって、他宗、とくに天台宗に対して説得力をもたせたものであり、信空は他宗からの弾圧処理に当たっていたことや円頓戒の戒師として天台宗に対して発言力や影響力をもっていたことから、この説示をもって他宗からの疑問や批判に対して信空が答えたものという背景があることを明らかにしている。「十七条⑤」には、念仏の修し方と称える際の心構えが説かれ、『明義進行集』や「信空伝説の詞」との比較から、この御法語は信空の「白河消息」が原本であることを指摘し、そこから『明義進行集』や「十七条⑤」へと伝わっていくという伝承過程を示している。さらに、この御法語の背景には明遍や天台僧覚倫との関連もうかがえ、明遍と信空は血族的に近く、その一族のなかには、法然教団を守ろうとする血族的な集まりがあると指摘している。「十七条④・⑧」には、念仏と諸行といった念仏論が説かれ、「信空伝説の詞」の説示との関係から、「十七条御

法語」と信空の関わりがより明確になるとした。また「十七条⑤」で注目した覚倫と、廬山寺を通して関係をもつ禅仙や永弁も「十七条御法語」と関連がある人物として注目している。何れも天台僧であるが、これらの質問に信空や明遍が法然の教えをもって答えているという構図を推定している。さらに、「十七条⑤」の時と異なり、「白河消息」のような原本が確認できないことから、原本の他に、口伝という伝わり方もあると指摘している。最後に「十七条⑩・⑫」には、三種行儀について説かれ、『明義進行集』には雅成親王が隆寛・明禅・聖覚と念仏往生に関する質問を書簡にてやりとりしていたことが示され、その質疑応答のなかに「十七条⑩・⑫」の内容が説かれているとし、雅成親王は天台教団と深い関わりをもつ人物であり、ここでも天台の立場からの質問に対して隆寛等が法然の教えをもって答えるという背景があると指摘している。以上、各条を検討した結果、公胤・源信・覚倫・禅仙・永弁・雅成親王という天台宗との関係が深い人物が関連しているとし、天台の思想をもつ者からの質問や批判に対して、信空や明遍、隆寛等が、法然の教えをもって対処し、さらに、その論争に法然自身は関わっていないと指摘している。

第三章では、第一章で提示した二系統のうち、『広疑瑞決集』の伝承系統に属する御法語である「十七条①・③・⑭」の三条について検討している。「十七条①」には、第二十願について説かれ、法然は他の文献で第二十願解釈を述べるものがほとんどなく、ここに説かれる三生、百年の内に往生がかなうという内容はどこにもみられないことから真偽問題が浮上するとする。そこで法然門下の文献から関連内容を検索し、『東宗要』と『広疑瑞決集』の二文献のみに同様の内容が説かれており、このうち、『広疑瑞決集』に、この内容が信空からの「相伝」であると明示されている点に注目し、原本から『広疑瑞決集』や「十七条御法語」に伝承される背景を明らかにしている。また、信空だけでなく、明遍や南都においてもこの三願が重要な問題となっていたことを確認し、第二十願が、そもそも念仏による往生を願体としたものではなく、阿弥陀仏との結縁の強さを示すものであり、阿弥陀仏と一度でも縁を結んだ者は、いつか必ずその願いが果遂し、往生がかなうというものであるととらえることによって、「十七条①」や『広疑瑞決集』に説かれる内容

が法然教学として問題がないと結論づけている。同時に、この内容は法然が積極的に自身の教学を示すものとは類を異にし、他者からの質問に対する問答のなかで説かれているとした。「十七条⑭」は、第十九願が諸行の人を第十八願にひきこむという内容で、門下の文献のなかでも『広疑瑞決集』に第二十願と同様に「相伝」であることが説かれている点に注目している。そこには、信瑞の他宗からの批判に対する強い対抗意識があらわされており、信瑞には對他宗という意識があり、そのために信空や隆寛といった師から「相伝」された法然の解釈をもって他宗に対抗しようとする構図であるとする。また、ここに挙げられていた批判は、『興福寺奏状』に示される内容と一致し、南都からの批判であったことが推測できるとする。「十七条③」は、往生以後、地藏菩薩等が覺りを目指す仲間となるという、他の法然法語にはみられない内容であり、『広疑瑞決集』のみに同様の説が説かれる点も先の二つの御法語と同様であるとした。ここで論者は、『興福寺奏状』を起草した貞慶や、その教えを引き継ぐ良遍等、南都の間には強い地藏信仰があることに注目している。このように第三章でも、對他宗という意識のなかで、信瑞が信空等によって相伝された法然の解釈によって対処していたという背景が明らかとなり、第二章と異なる点は、この三つの内容は法然教学的に珍しいこと、相手が南都であることであるとする。

第四章では、「十七条御法語」のなかで、『明義進行集』系統にも『広疑瑞決集』系統にも属さない「十七条⑥・⑦・⑨・⑪・⑮」の五つの御法語について検討している。このうち、「十七条⑪・⑮」には、念声は一論と三心論が説かれ、ともに明遍と良遍が深く関わっていること、『興福寺奏状』や明恵からの批判が意識されていることを確認している。「十七条⑥・⑦・⑨」には、それぞれ願成就文、第十八願の「至心信樂欲生我國」、就行立信積について説かれ、これら三つの御法語に関しては、特定の人物や伝承背景を確定することができないとする。しかし、教義的には問題がない内容であるとしている。

第五章では、「十七条御法語」に示される内容と、法然の教義書や他の御法語に説かれる内容との比較検討を行い、改めて「十七条御法語」の思想面における特徴を明確に示している。各思想について比較した結果、「十七条御法語」は法然教学の枠内におさまるものであるが、法然が自ら積極的に示

そうした教学とは趣きを異にする特殊なものであるという特徴があると指摘している。

第六章では、本論の研究目的である、「十七条御法語」の伝承過程について、現存する形に至るまでを三段階に分けて考察している。第一段階は法然によって「十七条御法語」に説かれる内容が語られた際の背景として、はじめに良遍の思想や人物像を整理することによって、当時の南都における仏教の問題点を確認している。また第三章や第四章で注目した『興福寺奏状』や明恵の批判と「十七条御法語」との対応を確認し、十七条中、十五条が、南都との関係があることを明らかにしている。これをふまえて、第四章の最後に検討した伝承不明の三つの御法語のうち、「十七条⑥」と「十七条⑦」の二つも南都で問題となっていた教義内容であることを確認している。また、第二章で検討した天台宗との関係を加え、十七条中十六条が他宗との関係を有すると結論づけている。第二段階は信瑞によってこれらの内容が採用された際の背景として、信瑞が師からの「相伝」を正確に伝えるため、原本に手を加えることなく、その相伝を他宗からの批判へ対抗する法語としていたことを確認している。また「十七条御法語」は『明義進行集』等から直接伝わったものではなく、それ以前の原本や口伝が想定できることを確認している。さらに、「十七条御法語」の並び順は、浄土宗義を学ぶ者を対象にしているのではなく、他宗の者や民衆にとって関心のある内容が前半部に並び、徐々に教義的な内容に導いていく意図があることを明らかにしている。続いて、法然の御法語には「A、教義体系を示し、教義の本質を説く類のもの」と「B、聞かれたから答えたという類のもの」という二種類があり、Bのみが示される御法語を文面のみで受け止めるならば、非法然的と判断されてしまうのであり、御法語が説かれた背景を確認する重要性を指摘し、「十七条御法語」はBにあたるとした。続いて第三段階は、最終的に『西方指南抄』に採用される際とその後の展開について検討し、「十七条御法語」は、親鸞による意図的な加筆や編集の可能性は低く、親鸞は原本を書写していると指摘している。しかし、「十七条御法語」に示される三願解釈や要門・弘願という理解が親鸞に影響を与えた可能性がある」と指摘している。最後に、後に『和語灯録』や『四十八巻伝』へと展開する背景については、「十七条御法語」が特

殊な背景のなかで成立し、伝統的な法然教学とは異質のものであるということ道を道光や舜昌等が注意し、誤解を恐れて削除や改変を加え、問題のない形で採用したと推察されると結論づけている。

審査結果の要旨

本学位請求論文（課程博士）は、「法然上人「十七条御法語」の研究―伝承と展開の背景―」と題し、法然の遺文集として伝わる『西方指南抄』所収の「十七条御法語」について、一々の法語がどのような経緯を経て「十七条御法語」としてまとめられたのか、その伝承を明らかにし、同時にそれに伴う諸問題を解決することを目的としている。

論者は、従来の法然法語研究は、法然の思想を明らかにするための証左として内容を検討することや、法然の教義書・遺文集・伝記類のなかでの比較検討による書誌的研究、思想研究等が中心であり、『選択集』や『黒谷上人語灯録』等に説かれない内容や、疑わしい内容は偽撰と判断される傾向にあるものの、それぞれの御法語には『選択集』等とは異なり、複雑な説示背景があると考えられる、と指摘する。そこで論者は、「十七条御法語」の各条について、はじめに内容解釈と問題提起を行い、法然教学との比較によって「十七条御法語」伝承の正統性や法然の思想について検討し、そのうえで、法然門下の著作や『語灯録』『四十八卷伝』や『明義進行集』『広疑瑞決集』等との比較によって判明する背景をもとに伝承について考察している。

そうした検討を施した上で、論者は「十七条御法語」の大きな特徴として、法然の教義書や他の法語にはあまりみられない内容が多いということに注目している。例えば、「十七条御法語」第一条には阿弥陀仏の四十八願の第二十願に関する問答が示されているが、ここに示される質問は明らかに専修念仏者から出されたものとは考えられないことから、本法語が説かれた背景を考察し、本論第二章では、『明義進行集』系統の法語として、天台宗との関係が深く、第三・第四章では、『広疑瑞決集』系統の法語として、南都との関係が深いことを明らかにしている。それらをふまえ、良遍・『興福寺奏状』・明恵との関係をみることにより、「十七条御法語」のなか、十六の法語が南都や天台宗との関連があると想定している。

さらに論者は、信空や明遍が、他宗からの批判に対して、法然から聞いていた教義をもってそのまま答えたか、または批判に対応するために信空らが法然から直接聞いたものが残り、それを信瑞が『明義進行集』や『広疑瑞決集』に、師からの「相伝」として採用したという背景があるかを考察している。その結果、「十七条御法語」で示される法語の内容は、法然が自身の教義を示そうとして説いたものではなく、質問に対して自身の教義の枠内で答えたという類のものが多くと推定している。ちなみに信瑞は『明義進行集』等を編集する際、自身の思想を交えないため、そこには信空等の師から伝えられた、法然の「相伝」がしっかりと残っているとし、「十七条御法語」の説示背景を知るための注目点であると指摘している。

以上のような検討を施した上で論者は、「十七条御法語」の真撰・偽撰について検討し、その遺文で説示される内容が、『選択集』と異なるから、または聖光・良忠の思想と異なるからなどといった根拠のみで偽撰としてしまつては、法然の幅のある教学体系を正しく受け取ることはできないと指摘する。しかし、「十七条御法語」は、信瑞による「相伝」によって、法然の思想が確実に伝えられたものであると捉えられ、このような種類の法語は「十七条御法語」のみではないであろうとしている。特に「十七条御法語」においては、単に法然が述べたものとして残っているのではなく、その伝承過程に信空や明遍等の多くの諸師が関係し、信瑞によって相伝されていることが重要であり、また何者かの批判に対応するために、『選択集』等とは異なる内容が説かれることはあり得るとしている。そして、論者は、法然法語に、教義の本質を説くものと、聞かれたから答えたという二種類の説き方があると指摘し、質的には異なるが、両者とも法然の詞として受けとめてもよいとしている。その上で、このような背景を考慮することなく、内容のみで真偽を判断してきたこれまでの御法語研究には問題があり、「十七条御法語」は法然の思想が伝えられた遺文として受け取るべきものであると結論づけている。

口述試問、並びに、委員による審査会においては、①構成の都合上、論述が煩瑣となり、かつ、重複する説示も多く見受けられ、全体的に精査すべきではないか、②すべての条を取り上げるというスタンスから、いささか強引

な立論を進める箇所があり、不明な点は今後の課題とするという潔い姿勢も必要ではないか、などのいくつかの改善点が指摘された。もちろん、こうした点については、論者自身の意識にも留められていることであろうことから、その解決には、早急にならず、筆者自身のライフワークとして着実に進めていただくことを大いに望むところである。そうした地道な作業こそが、筆者自身が語っている、本論文において展開した手続きを法然の他の法語にもあてはめていくという遠大な目標の大切な一歩となることにつながるからである。なるほど、これまで多くの研究者が進めてきたような法然の思想をとらえるために各種法語を検討した上で、その法語を偽撰と判断するという手続きを踏むことは重要な手段だが、論者が指摘しているように、各法語の説示背景をしっかりと踏まえた上で、法然の思想として捉えられるものがあるとするならば、真撰として残すべきとする立場は、今後の法然法語研究の幅が大きく広がるものとなることを予想させるものである。いずれにしても、本論文において、「十七条御法語」を取り上げ、その撰述背景を探り、法然御法語全体の位置づけを明らかにした取り組みは、今後の法然御法語研究、ひいては、法然教学全体の新たな地平を切り拓く貴重な成果であり、課程博士論文として相応しいことを述べて審査報告とさせていただきます。